



西島秀俊さんが最高裁にお越しになり
島田仁郎最高裁長官と歓談されました



俳優

西島秀俊

対談 裁判員

西島 ところで、来年から裁判員制度が始まると聞いていますが、なぜ、今、裁判員制度なのですか。

長官 ひとつは、刑事裁判の世界に、国民の皆さんの感覚を取り入れたい、ということです。プロの法律家だけで裁判をやっていると、どうしても、考え方の幅が狭くなってしまふところがあります。また、国民の皆さんに、裁判のことを、裁判がどのように進められているのか、もっとよく知ってほしい、ということもあります。その中で、裁判官が一生懸命に仕事をしているということも知っていただけるかなとも思っています。

西島 ドラマで裁判官役を演じてみると、有罪無罪の判断、有罪の場合の量刑の判断というのは、非常に責任の重いものだと感じました。ドラマではなく、本当の裁判で、そのような判断に関与していくのは、正直こわい気がします。

長官 裁判員の役割について真剣に考えていただいている方ほど、本当に裁判員が務まるだろうか、気が重い、といった感想をお持ちになると思います。私は、裁判という仕事に「畏れ」を抱きながら、職務に当たってきましたし、そのような気持ちを持って裁判に臨むのは、大切なことだと思っています。

長官 本日は、ようこそ最高裁判所にお越しくださいました。ドラマ「ジャッジ」は、毎回楽しみに拝見しておりました。西島さん演じる主人公の裁判官が、事件に向き合い、悩みながら成長していく姿がとても印象的でした。現実の裁判官も、まさに、そのようにして成長しておりまして、裁判に携わる者として、裁判官の真剣な姿勢を見事に表現していただき、とてもうれしく思いました。

西島 裁判官としての経験豊富な長官から、そのような感想を言っていただけると、裁判官役に挑戦してよかったと本当にそう思います。それにしても、双方の言い分や利害が対立するなかで、ひとつの判断を示さなければならぬ裁判官のお仕事は大変だろうと思いました。

長官 裁判官が、真剣に事件に向き合い、当事者の心情も十分思いやって結論を出すこと、これが一番大事です。そうすれば、たとえその当事者にとって結論が不利でも、裁判官の気持ちが伝わって納得が得られる、ということもあるんです。ドラマを拝見していても、「西島裁判官」の思いが当事者に伝わっていく様子がにじみ出ていましたね。



最高裁判所長官
島田 仁 郎



裁判員制度を語る

ただ、裁判員裁判では、自分ひとりで決断する必要はないんです。いろいろな人生経験を経た裁判員6人と裁判官3人が、1つのチームを作って、対等の立場で議論を尽くして判断をしていくことになります。責任の重い仕事ではありますが、9人で誠実に議論をした上で結論を出すのですから、安心して参加していただきたいと思います。

西島 東京地方裁判所で裁判員法廷を見学させていただきました。裁判員の座る席が裁判官と並んで配置されているんですね。アメリカの裁判映画で出てくる陪審員席のように、裁判官席とは離れたところにあるものと思っていました。

長官 裁判員制度は、陪審制度とは違い、裁判官と裁判員が一体となって皆で考えましょうというものですから、裁判員と裁判官は並んで座るとするのが自然でしょうね。また、裁判員と裁判官が、法廷でも、互いに顔を見て意思疎通できるように、座席は、少し弓なりに並ぶようにしてあるんですよ。

西島 裁判員裁判が始まると、結論に変化が生じるのでしょうか。例えば、無罪が増えたりとか、刑罰が今より重くなったりとか。

長官 事件は、ひとつひとつが個性を持っていますので、今の時点で予想することは、なかなか難しいですね。ただ、裁判員の

皆さんの多様な意見が反映されて、量刑が今までとは少し違ってくるようなこともあるかもしれません。それが、国民感情や時代の流れに沿った公平なものであれば、国民からも理解を得られるでしょうし、それは裁判員制度のひとつの成果であるといえましょう。

西島 ドラマでもぶ厚い記録が積まれたシーンがありましたが、裁判では、専門用語で書かれた多くの書面を読まないといけない、というイメージがあります。

長官 今までの裁判のやり方を、裁判員の方に参加していただくのにふさわしいかたちへと変えていきます。法廷で審理に立ち会っていれば内容が理解でき、書面を読み込む必要がないかたちにしていくのです。

裁判のことは裁判官に任せておけばよいといった気持ちをお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、せっかくの機会ですから、裁判員として刑事裁判に参加しようという積極的なお気持ちになって、裁判所にお越しいただきたいと思います。

西島 裁判員制度については、引き続き、関心を持っていきたいと思います。

長官 本日は、ありがとうございました。